



JIC インフォメーション

第 170 号 2012 年 04 月 10 日

年 4 回 1・4・7・11 月の 10 日発行

1 部 500 円

発行所: JIC 国際親善交流センター 発行責任者: 伏田昌義

<http://www.jic-web.co.jp>

東京オフィス: 〒160-0004 東京都新宿区四谷 2-14-8 YPC ビル 7F TEL: 03-3355-7294 jictokyo@jic-web.co.jp

大阪・ロシア留学デスク: 〒540-0032 大阪府大阪市中央区天満橋京町 2-13 ワキタ天満橋ビル 812 号 TEL: 06-6944-2341

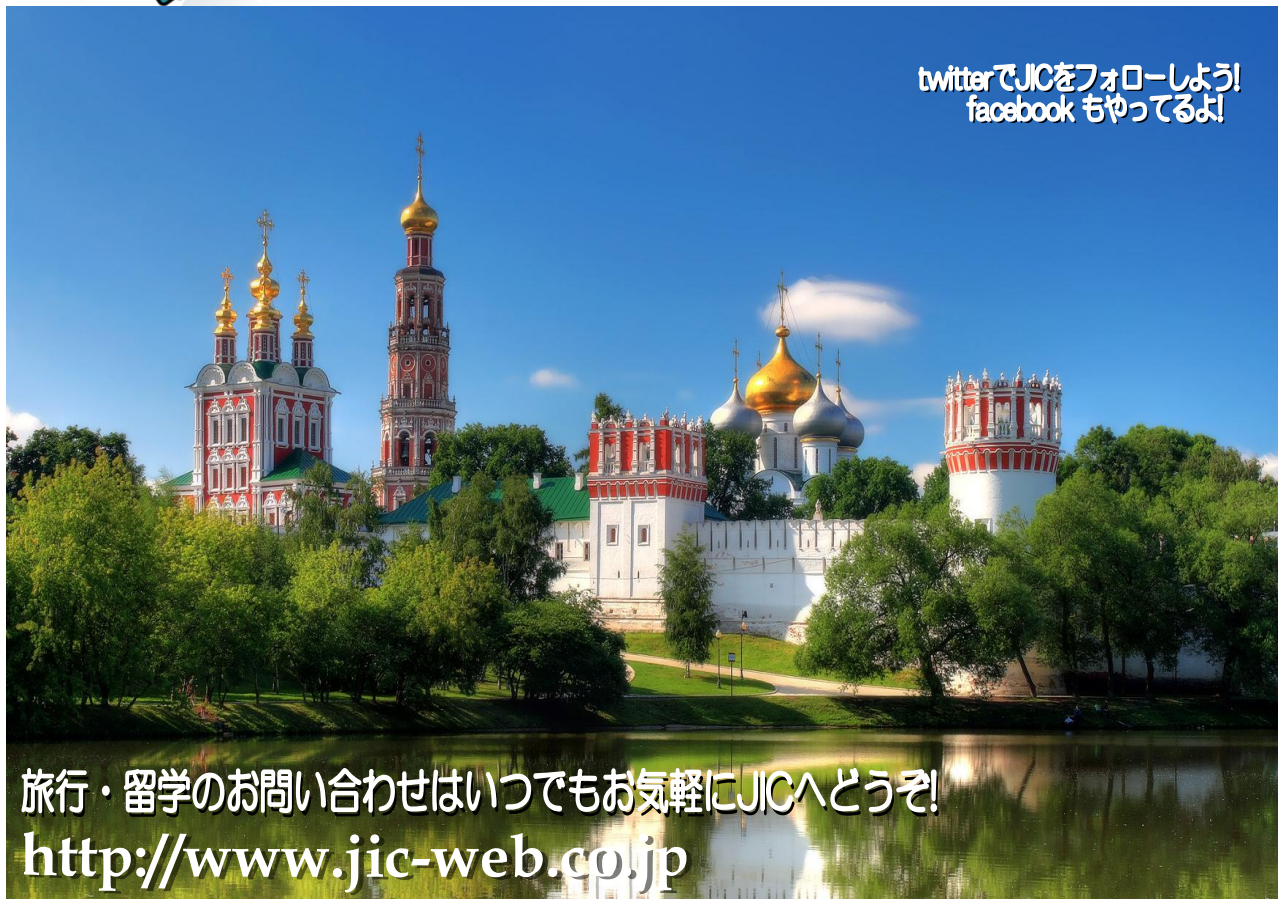
ロシア・旧ソ連
国際交流誌

Наступил сезон поездки в Россию!!

ロシア旅行のシーズン到来!!



twitterでJICをフォローしよう!
facebook もやってるよ!



旅行・留学のお問い合わせはいつでもお気軽にJICへどうぞ!

<http://www.jic-web.co.jp>

— モスクワ ノヴォデヴィチ修道院 —

JIC ロシアセミナー講演録

ペンパル情報 15P

「映画から読み解く現代ロシア」坂庭 淳史 2-11P

JIC 情報 16P

〈連載〉「エクメネの最果てへ」—サハ共和国 冬の旅—

岡本 健裕 12-14P

JIC では、Jクラブ(JIC 友の会)会員を募集しています。
年 4 回の情報満載のインフォメーションをお届けします。

映画から読み解く現代ロシア

坂庭 淳史(早稲田大学准教授)

昨年 11 月 19 日、早稲田大学の坂庭淳史先生を講師にお迎えして、JIC ロシアセミナーを東京で開催しました。以下はその講演録です。映画からどのように現代ロシアを読み解いていくのでしょうか。この機会にぜひご一読ください。

今日の講演の目的は大きく二つあります。一つは時間の横軸。現在のロシア、とくにモスクワで何が起きているのかということ。もう一つは時間の縦軸です。歴史の時間の中で、いわゆる「ロシア的精神」というものがいろいろと論じられてきていますが、今回はその中の一つと結びつけてお話ししたいと思います。そして、この二つの視点から見えてくるロシアの姿というものを考えていきましょう。

「映画から読み解く現代ロシア」というテーマを掲げておきながら、今日紹介する映画が何か、具体的な作品名を予告していませんでした。ロシア映画と聞いて、皆さんはどんなイメージを持っていますか。古くはセルゲイ・エイゼンシュテイン(1898-1948)から始まり、アンドレイ・タルコフスキー(1932-1986)、彼は私の最も好きな監督です、現役で活躍しているアレクサンドル・ソクーロフ(1951-)など、ソ連時代を含めて、ロシアには世界的にもよく知られた映画監督がたくさんいますね。



私の研究領域は、19 世紀ロシアの文学と思想です。それに加えてタルコフスキー父子、映画監督のアンドレイ・タルコフスキーと、その父である詩人のアルセーニー・タルコフスキー、そのどちらも研究対象としています。そして最も強く関心を持っているのが、フョードル・チュッチェフ(1803-1873)という人です。

Умом Россию не понять,
ロシアは頭ではわからない
Аршином общим не измерить:
共通の尺度では測れない
У ней особенная стать—
ロシアには特別な性質がある
В Россию можно только верить.
ロシアは信じることのみでできるのだ

チュッチェフは 19 世紀の外交官であり、詩人であった人で、後年は検閲官もしていました。ロシア文学と、当時のロシア社会や外交というものを、両方見ることができて面白い存在なのですが、日本ではそれほど有名な人ではありません。ただ、この四行詩はロシア、ロシア文化に関する本ではよく引用されていますので、ご存知のかたも多いのではないのでしょうか。

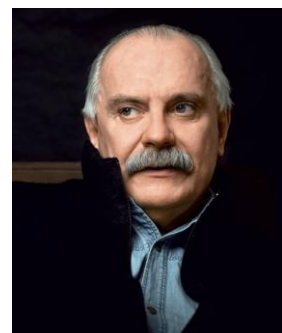
ここにいらっしゃる皆さんは、ロシア社会やロシア人とこれまでも、あるいはこれから身近に接する機会があるでしょう。一行目にあるように、ロシアは考えれば考えるほど、「何なんだ、この国は?!」と思わされることがあります。そこが魅力でもあるのですが、そういうロシアのよく分からない、奥深いところを今日は映画を通じて見ていきましょう。

ニキータ・ミハルコフ監督作品『12 Двенадцать』

今日取り上げる映画は、ニキータ・ミハルコフ(1945-) 監督の 2007 年の映画『12 Двенадцать』です。日本語版では『12 人の怒れる男』という題がついています。題名を聞くと思い当たる人もいるかもしれませんがね。

ミハルコフという監督はどんな人か。彼は私がロシア映画で二番目に好きな監督で、1994 年に『太陽に灼かれて』という、スターリン時代に粛清されたある幹部の生涯を描いた映画を作っています(その続編が 2008 年の『戦火のナージャ』)が、そのモスクワでの最初の上映を私も見に行きました。たまたま会場の出入口でミハルコフ監督自身が客を出迎えるように立っていて、でもロシアの人はなぜかみんな素通りしていくので、これはもったいないと思って、思い切って「あなたの研究をするために日本からやってきました」と挨拶してしまいました。そうしたらとても嬉しそうに高い声で笑ってくれて、がっちり握手してくれまして、それから私の方もタルコフスキーに次いで、二番目に好きな監督になったというわけです(ミハルコフの主な作品としては、他に『機械じかけのピアノのための未完成の戯曲』(1977)、『黒い瞳』(1987)、『シベリアの理髪師』(1998)など)。

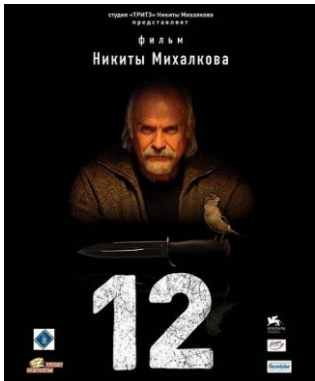
ニキータ・ミハルコフは芸術一家の出身で、お父さんのセルゲイ・ミハルコフはロシア国歌を作詞しています。もともとソヴィエト国歌の歌詞を書いた人ですが、ソ連が崩壊してロシアに変わった時に、曲はそのまま歌詞だけを変えることになり、その歌詞もセルゲイが書きました。お母さんも詩人ですし、この人のお兄さん、アンドレイ・コンチャロフスキーも映画監督で、『暴走機関車』というハリウッドで撮った映画をご存知のかたもいるでしょう。コンチャロフスキーは、アンドレイ・タルコフスキーと映画大学時代の友達で、当時 12-13 歳だったニキ



ータは兄たちの使い走りにされていたのだと回想しています。

先にあげたタルコフスキーがドストエフスキーの系譜を継ぐような精神世界を描いているとすれば、ミハルコフはチェーホフに通ずる人間の、とりわけ平凡な人間の悲哀を描くのに長けた人です。『機械仕掛けのピアノのための未完成の戯曲』などは、これはミハルコフのベストだと私は思いますが、チェーホフのごく初期の戯曲をもとにした、まさにそういった作品です。こちらもぜひ見てみてください。

『12 人の怒れる男』のロシア版リメイク



それでは、今日の本題、映画『12』を紹介しましょう。これは、1957 年にシドニー・ルメット監督がハリウッドで製作した映画『12 人の怒れる男』のリメイクです。

ルメット版(アメリカ版)は、父親を刺殺したとされる、スラムで暮らす 18 歳の少年をめぐる 12 人の陪審員たちの議論を追って展開します。映画は、ある暑い一日、「エアコンがあればいいのにな」と言いながら、みんな窓を開けてパタパタやっているとところから始まります。最初は陪審員の多くが無関心のまま「有罪」としていたのが、犯行に使われたナイフ、目撃者の証言のあやふやさなどに気づき、最終的に少年は「無罪」となります。映画を通して告発されるのは、「スラムの子供なら平気で人を殺す」というような根深い偏見です。この陪審の様子と、当時のアメリカ社会が重なってきます。

この『12 人の怒れる男』を現代ロシアに設定を置き換えたのが『12』です。ちなみに日本でもリメイクが作られています。三谷幸喜の舞台『12 人の優しい日本人』(後に映画化)がありますし、筒井康隆が、短編ですが『12 人の浮かれる男』という小説を書いています。どちらもコメディタッチですが、国民性を垣間見るといってもやはり面白い作品です。

さて、ルメット版もミハルコフ版も、テーマそのものはもちろん、12 人の陪審員の顔ぶれが注目されます。アメリカ版では、フットボールのコーチ、営業マン、経営者、株の仲買人、労働者、セールスマン(ヤンキースファン)、建築家、老人、移民の職人、広告マンといったメンバーが陪審員として集まっています。アメリカっぽいですね。

ロシア版の陪審員はというと、物理学者、芸術家(元将校)、タクシー運転手(ナショナリスト)、ユダヤ人の老人、年金生活者、テレビプロデューサー(富豪)、カフカース出身の外科医、墓の管理者(詩人)、大学の学部長(父親は共産党員だった)といったメンバーになります。アメリカ版の広

告マンがロシア版ではテレビプロデューサーになっていたりと、重なるところもあります。アメリカの人気スポーツは野球とアメフトで、映画にもそれが取り入れられていますが、もちろんロシア版には出てきません。ちなみに、ロシアでの国民的スポーツといえばサッカーとアイスホッケーですね。

次に、ロシア版リメイクのあらすじですが、大まかに言うと、「ある真冬の寒い一日、義理の父親を刺殺したとされる、チェチェン人の 18 歳の少年をめぐる 12 人の陪審員たちの議論」です。さすがロシアというわけで、「暑い一日」は「寒い一日」に、そして、容疑者は「スラムで暮らす 18 歳の少年」から「チェチェン人の 18 歳の少年」に変わっています。基本的なストーリーは同じですが、ロシア版で告発されるのは、「チェチェンの子供なら平気で人を刺す」という偏見です。これもかなり重要です。

(映画のはじまりの場面を上映)

映画の始まりの部分です。これもちょっとロシアらしいですね。ロシアでは陪審員の審査はちゃんと裁判所の一室で行われるのですが、映画では裁判所の陪審室が工事中か何かの理由で使えなくて、隣にある小学校の体育館を使わせてもらうという設定になっています。

当初、陪審員たちは早く終わらせたくて、やっぱり「もう有罪でいいよね」となりかけるのですが、一人が異を唱えたところから議論が始まっていきます。その中で事件とは少し離れて、それぞれの陪審員の口から、彼らの抱える問題が吐露されていきます。そこには、今のロシア社会が反映されています。これはエンターテインメント映画としては政治性が強すぎると批判されているところでもあります。現実のロシア社会を知るためには示唆に富んでいるのです。

陪審員制度そのものは、ロシアでも 2010 年から全国で施行されています。陪審員制度が提案されたのはまだソ連時代の 1989 年で、ソヴィエトにも民主主義的要素を持ち込むべきだということで導入が検討され、ロシアに引き継がれたものです。ソ連以前の帝政時代にも陪審員制度が実施されていました。

ロシア文化の底流にある父権的なもの

ここではもう一つ、大きく扱われているわけではありませんが、「父親殺し」というのはロシア文学あるいはロシア文化の中では大きなテーマですので、少しだけお話しておきましょう。ご存知のとおり、ドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』(1879-1880)は、「父殺し」が小説の大きなテーマになっているわけです。

ソヴィエト時代になると、これは半ば伝説化していてどこまでが真実なのかわかりませんが、1931 年の「パブリク・モロゾフ事件」というものもあります。ピオネール(共産党の児童組織)に所属する少年が、実の父親を「反ソヴィエト的行為」で告発し、告発された父親は処刑されます。パブリク少年にと

っては、スターリンこそが父親であって、他の父親は要らないという論理がピオネールの理想として一時期もてはやされました。しかし事件の後、少年は親族によって殺されてしまいます。

最近の映画では、パーヴェル・チュフライ監督の『パパってなに？ Bop』(1997)があります。早くに父を亡くした子供が、お父さんがほしくて、その父親像をたまたま母親に近寄ってきた軍人にあてはめてしまいます。この人が実はニセ軍人で、どうしようもないゴロツキなのです。何年かぶりに再会した時に、父と思った人の正体を知った子供は、裏切られた気持ちになって彼を射殺するという映画です。

2003 年の映画で、アンドレイ・タルコフスキーの再来と言われる監督、アンドレイ・ズヴァギンツェフの『父、帰る Возвращение』もあります。この映画は傑作とまで言わないにしてもおすすめです。映画は、行方不明になっていたお父さんが、ある日突然、十何年ぶりに帰ってくるところから始まります。必ずしも父親を殺すというわけではないのですが、息子たちと父の間の、長いこと会っていなかった肉親の微妙な空気が映画全体に流れていて、最後にお父さんは死んでしまいます。

こういう一連の作品を通して見えてくるのは、帝政ロシアからソヴィエト時代を通して、ロシア社会において、父親とか父権的なものが特別な位置を占めているということで、ロシア人にとって父権的なものとは何なのだろうとかなり考えさせられます。

ロシアとチェチェン(カフカース)

映画『12』では、殺されるのは実の父ではなく義理の父です。少年の義父はロシア人将校です。チェチェンの中にもロシアに対して二つの流派というか、考え方があり、ロシアと徹底的に戦おうとする好戦的な人たちと、もう戦いはやめようという穏健派の人たちがいます。少年の両親は穏健派だったのですが好戦派のチェチェン人に殺されてしまい、その時たまたま兵士としてチェチェンに来ていたロシア人将校が養子として少年を引き取るのです。このあたりは、ロシア側の一方通行的な理解とはいえ、ロシアとチェチェンの文化的な関係も暗に示されているように思います。

チェチェンとカフカースについて少し触れておきましょう。カフカース地域は 19 世紀に帝政ロシアの支配下に組み入れられていくわけですが、その中で最も激しく抵抗して、この地域で最後にロシアに併合されたのがチェチェンです(1859 年)。ソ連体制の下でも、第二次世界大戦時にドイツに協力したという濡れ衣を着せられ、スターリンによって民族ごと中央アジアに強制移住させられるという苦難を味わっています。



その後、チェチェンはソ連時代末期の 1991 年に独立宣言をするわけですが、1994 年から 96 年と、1999 年から 2000 年の 2 回にわたって、ロシア軍の軍事介入を受け、独立を抑え込まれることになります。

ロシアから見ると、チェチェンにはロシアのパイプラインが通っている所以で独立させるわけにはいかないという面もあるようです。また、チェチェンはおもにイスラム教徒たちの土地です。自分たちロシアという国は実に様々な要素で構成されており、ロシア正教だけでなく、仏教もあればイスラム教もある。そういう意味で多文化の国家であって、イスラム教の国々ともうまくやっていけるという姿勢を世界に見せる、そういう狙いもあると思います。最近のニュースによると、戦いはすでに終結し、現地は小康状態を保っています。チェチェン人の側から見ても、経済的にチェチェンが独立するのは難しいと考えているようです。

文学に目を向けると、チェチェンあるいはカフカースは、ロシアの中の「他者」としてロマン主義的な憧憬の対象にもなってきました。有名なものでは、レールモントフ『現代の英雄』(1840)、プーシキン『カフカースの虜』(1820-21)、同じ題でトルストイ『カフカースの虜』(1872)といった作品が知られています。トルストイの『カフカースの虜』を現代のチェチェン戦争に置き換えて映画化したセルゲイ・ボドロフ監督の同名の映画(1996)もありますね。たとえばトルストイの『カフカースの虜』では、カフカースで捕らわれの身になったロシア兵が、地元の子供たちと仲良くなって、最終的にその子らの助けを借りて脱走するという話になっています。本来は仇同士であるはずの現地の人々、カフカースの人々との触れ合いがどの作品にも描かれています。

『現代の英雄』では、カフカースの人々に対する憧れも描かれています。馬を上手に扱って山野を駆ける人々の勇壮さへの羨望です。ただし、他方では、その憧れの裏返しとして、残虐性や暴力性というものをロシア人の目から描き出している。あたかもマトリョーシカ(入れ子人形)のように、共通してオリエンタリズムの眼差しが感じられます。

どうということかと言いますと、19 世紀、とくに 19 世紀前半には、ロシアは自らをヨーロッパの一部だと思っているわけですが、ロシア以外のヨーロッパ諸国からは、「ロシアのような野蛮な国はヨーロッパの一員ではない」と見られていました。あるいは「ロシアの文化はヨーロッパのコピーでしかない」と批判されてもいます。その背景には、ロシアがナポレオンとの戦いに勝利して(1812 年)——この勝利には「冬將軍」の味方もあったわけですが、急激に軍勢力と国力を増強させたことに対する各国の怖れがありました。そういう西欧からの目線を、ロシアはカフカースに投影して、逆に自分た



ちを優位に置きながら、ロシアがヨーロッパから見られている暴力性だとか残虐性といったものをカフカースに見出そうとしたところがあるのです。

現在のロシア社会にもカフカースに対する、オリエンタリズム的な偏見は残っています。この『12』では、タクシー運転手の陪審員がそういったロシア人の典型として、ややオーバーに表現されているようです。

メンバーの抱えるもの～飲酒／アルコール

では、ここで少し映画のつづきを見ましょう。陪審員たちのうちの何人かをクローズアップしていこうと思います。

(映画の一場面を上映)

こういう風に陪審の議論は進んでいくのですが、この少年の事件を審理しつつ、陪審員たちは「自分とは何なのか」ということを少しずつ語りだします。そのきっかけを作っているのが、今登場した物理学者で、みんながもう有罪でいいよと言っているなかで、最初に一人だけ無罪を主張した人です。

この物理学者が抱える、とてもロシアらしいテーマが最初に出てきます。飲酒・アルコールの問題です。下世話な話ですが、ロシアの一人当たりの年間の純アルコール消費量は 18 リットル(日本は 7.8 リットル)で、これはウォッカ 50 本分に当たるそうです。年間 50 万人がアルコール中毒で死亡し、飲酒運転で 8000 人が死亡、男性の平均寿命は、飲酒だけが原因ではないかもしれませんが、いまだに 60 歳前後にとどまっています。飲酒問題は社会全体を覆っており、学問を究めた人ですら酒に溺れていくというところがあります。

あらかじめ言っておくと、『12』に出てくる俳優は、それぞれがロシア映画、演劇界のベテランで、素晴らしい役者さんたちばかりです。この映画を見ておくと他のロシア映画を見たときにも、「ああ、『12』に出てきた人だ」と分かってきつと親



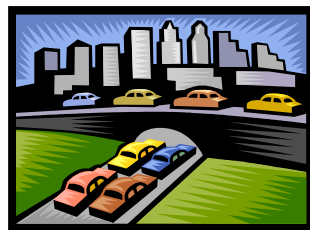
しみがわきますよ。物理学者を演じているのはセルゲイ・マコヴェツキーという俳優です。この映画のキーパーソンの一人で、冒頭、陪審が始まるまえに彼が体育館の片隅に何かをそっと置くシーンがあります。その時は何を置いたのかわからないのですが、それが最後になって分かります。

アルコールの話が続けると、「アルコール依存は国民的災厄だ」と言って、メドヴェージェフ大統領も本腰を入れてロシア人のアルコール摂取量を減らす政策に取り組んでいます。1 人当たりの純アルコール消費量を 18 リットルから 12 リットルに減らすのが目標です。最近の 10 年間で、ウォッカの消費量は 3 割減となっており、その分ビールの消費量が 4 割増と伸びているという数字があります。特筆すべきは、メドヴェージェフが署名した「反アルコール法」です。これは、「2013 年からビールはアルコールとする」という

法律なのです。現時点ではビールは、10%以上のアルコール度のものがアルコール扱い(酒)で、10%未満のものは清涼飲料水扱いになっているのですね。ソ連時代のビールはとても飲めたものではなかったのですが、ソヴィエト崩壊後に西側の消費物資がたくさん入ってきて、ロシアのビールの味もどんどん美味しくなってきました。今では日本のビールとも甲乙つけがたい感じです。

バルチカというシリーズのビールは日本でもかなり知られています。ロシアも最近やっとそういう国になってきたかと思うのですが、ラベルに 1 から 9 まで数字が付いていて、それぞれ若干原料が違い、アルコール度数 8%のものがあれば 4%のものもあるという具合になっています。今は 0 というラベルもあって、これはなんとノンアルコール・ビールです。そして、この 9 月にモスクワに行った時に知りましたが、ロシアでも今は夜 11 時を過ぎると、店でアルコール飲料を買うことが出来なくなっています。アルコール対策はかなり進んできています。

メンバーの抱えるもの～渋滞、そしてエイリアン



次の場面を見ましょう。陪審員の中にタクシー運転手が出てきます。この運転手がナショナリストで、ロシア人の一つの典型的なのだらうと思います。演じているのは、セルゲイ・ガ

マンという、私が今最も気になっている俳優です。

(映画の一場面を上映)

ロシア、特にモスクワの抱える問題として、彼の「モスクワっ子はエイリアンのようだ」というセリフに注目したいのですが、その前段階として交通渋滞の話が出ていました。

最近のモスクワに行った人ならよく分かると思いますが、ここ数年、モスクワの渋滞は本当にひどい。私は 5 年ほど前にモスクワに行って、今年久しぶりにモスクワに行ってみたら、予想以上にひどくて、日本の帰省渋滞ほどではないにしても数キロにわたるような大渋滞が市内のあちこちで見られます。この渋滞は、ソヴィエト崩壊後のマイカーブームが引き起こしたものです。

ソヴィエト時代には、乗っている車によってその人の年齢や階層がだいたい分かったわけです。もちろん町を走っているのは、ほとんどがソヴィエト製の自動車でした。しかし、この 20 年間でずいぶん状況が変わりました。渋滞の車を眺めていると、それこそ車の見本市のようです。日本やドイツの車はもちろん、フランス、北欧、韓国やチェコの車なども走っています。最近ではアメリカのシボレーがロシアに工場を作ったそうで、アメリカ車もたくさん入っている。その渋滞の中で、ロシアの車がほとんど見られない。現実のタクシーの運転手さんに聞くと、「ロシアの車はもう駄目だよ」と言うの

ですが、様々な国のメーカーの車が走っている中で、ロシア車がほとんど見えないということが何かを象徴しているように思えてなりません。この後の話ともつながっていくわけです。

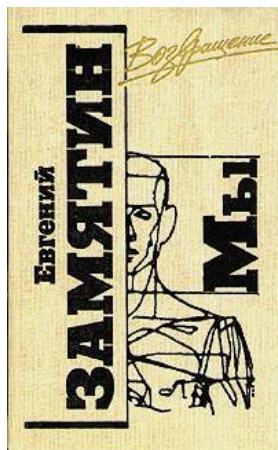
陪審員のタクシー運転手は、「モスクワが乗っ取られている」と言っていました。そこで「われわれ」とは何なのかという話が出てきます。「われわれ мы」と聞くと、少し文学好きな人は、20 世紀に書かれたザミャーチンの『われら Мы』という小説を思い浮かべるかもしれません。これは SF、アンチユートピア小説として知られていて、全体主義社会の中での「われわれ」を風刺的に描いた作品です。小説に描かれたような、完全に一体化した「われわれ」とその世界が——もちろんフィクションですけど——かつてはそれに近いものがあった。しかし今現在、ロシアで「われわれ」と言った時に、果たして私たちは「われわれ」と言えるのか、という話を彼はしているのですね。

「ロシア人」という場合に、ロシア語では二つの単語があります。русский と россиянин です。語学テキストのレベルで言えば、「彼はロシア人です」と言う時は、普通は русский を使いますね。しかし、ニュースや新聞などでは россиянин という言葉がたびたび出てきます。違いは русский が民族的な意味でのロシア人を指すのに対して、россиянин は民族に関わりなく、ロシア国民すべてを指すのです。日本人には少し感覚的に分かりにくいのですが、ロシア国民という中にはロシア人も入っていれば、ウクライナ

人もチェチェン人も入っている。ロシアは、人口約 1 億 4000 万人、160 以上の民族から成る多民族国家です。ロシア全

体の民族構成はロシア人が最大の約 80%を占め、タタール人、ウクライナ人、バシキール人、チュヴァシ人、チェチェン人と続いている。こうした人たちすべてが россиянин なのです。ただし、多民族国家といってもロシア人が圧倒的多数を占めているので、ロシア人を中心とした多民族国家ということが言えます。

ところが、近年のモスクワの状況はものすごく変わってきているのです。



ロシアの民族構成(2002 年)

ロシア人	79.83%
タタール人	3.83%
ウクライナ人	2.03%
バシキール人	1.15%
チュヴァシ人	1.13%
チェチェン人	0.94%

モスクワの民族構成(「РБК」誌 2007 年 11 号)

ロシア人	30%
アゼルバイジャン人	14%
タタール、バシキール、チュヴァシ人	10%
ウクライナ人	8%
アルメニア人	5%
タジク、ウズベク、カザフ、キルギス	5%
中国、コリア、ベトナム人	5%
チェチェン、ダゲスタン、イングーシ	5%

表を見て分かれるとおり、ロシア人の比率が国全体では約 80%なのに対して、モスクワでは市民 1100 万人のうち 30%しかロシア人がいません。その一方でロシア人の半分近くに迫っているのがアゼルバイジャン人です。その他にも、中央アジア、カフカース系の人たち、アジア系、実にさまざまな人たちをモスクワの街中で見かけるようになりました。こうした民族構成は、実際に町を歩いてみるとすぐに理解できます。本来の意味での多元的、多極的な状況が生み出されているわけですが、中心(核)になるものがなくなった、ロシア的なもの、русский と言われていたものが急速に薄れてきているようなのです。この何かがなくなっていく感覚はモスクワ特有で、サンクト・ペテルブルグではまだあまり感じられません。

ロシアの「多民族文化」は、よい意味でも悪い意味でも「ロシア人中心の多民族文化」でした。それが中心を失って漂っているという感じが現在のモスクワには顕著です。「スラブの三兄弟」と言われるロシア、ウクライナ、ベラルーシ人、民族的にも歴史的にも近い三つの民族を合わせても 462 万人で、首都モスクワの人口の半分に満たない。これで大丈夫なのかという危惧が新聞の記事にも見られます。

道案内できないモスクワ人／様々な国の料理

これは9月にモスクワを訪れた時に私自身が体験したことです。道案内できないモスクワ市民が増えています。私は、モスクワで目的地がちょっとでも分からない時には、ロシア語の勉強も兼ねて、通りがかりの人によく道を尋ねます。今回は、「私はここ出身ではないので Я не отсюда」という言葉がよく返ってきました。今まではなかった答えです。道を聞いてもよくわからないという人が大変多いのですね。

象徴的な例をお話ししましょう。モスクワには、国民詩人

であるアレクサンドル・プーシキン(1799-1837)の生まれた場所があります。そこにはプーシキンを記念した小学校が作られており、その小学校から歩いて 1-2 分、目と鼻の距離の所にプーシキンが洗礼をうけた教会があります。小学校の前で守衛さんに、「プーシキンが洗礼をうけた教会にはどう行けばいいですか」と聞いたら、「いやあ、Я не отсюда だから、よくわからない」と、プーシキン記念小学校の守衛さんからそういう答えが返ってきたのには驚きました。

もう一つは、モスクワにシチプコーフスキー横町という小さな通りがあって、そこにタルコフスキーの一家が住んでいた家の跡地があります。今は空き地になって草が生い茂っているだけなのですが、その跡地を見てこようとしたら、地図を見ても道が込み入っていてよく分からない。それで道を尋ねてみたら、やっぱりうまくいきません。4, 5 人目のおばあさんが、「こういう場所は私しか知らないわよ」、「私に道を聞いてくれるなんて、あんた運がいいね」とそこから 10 分弱、目的



地まで案内してくれました。彼女は三代続く「モスクワっ子」とのことで、「モスクワっ子 москвич がどんどんモスクワを出ていく。代わりに中央アジアやカフカースから人がたくさん入ってくるから大変だ」と言っていたのがとても印象に残りました。

象に残りました。

このような変化の原因は、労働の機会(仕事)を求めてモスクワに出て来る人がたくさんいるということです。モスクワの地価、物価が急激に上がる中で、もともと住んでいた人たちが外に押し出されていくという面もあります。今やモスクワは東京を抜いて世界一物価が高い都市と言われているのですが、2007 年のデータを比較してみると、東京の平均月給 31 万円に対して、モスクワは 8 万円なのです。ごく一部のお金持ちはものすごく羽振りが良くて、底辺にはなかなか経済的に豊かになれず何とか生活している人々が大量にいるという状況が想像されます。

料理に話題を変えましょう。今やモスクワではロシア料理だけでなくいろんな国の料理が食べられます。スターバックスやマクドナルドなどもたくさん出店しているし、最近では картошка というジャガイモを蒸かして上にチーズやキノコをのせたロシア的なファーストフードも出てきました。日本食や寿司もロシアでは大人気です。レストランの勢力図で考えると外国料理のシェアは相当なものですし、中でも日本料理店はいたる所で目につくようになっています。その他、アゼルバイジャン料理やグルジア料理もあります。чебуречная という店では、チェブレキというピロシキを売っているのですが、辞書で調べると「羊肉の入ったクリミア・カ

フカースのピロシキ」と書いてあります。こういった料理の店もすごく増えています。大きな店では接客態度を含めてよく訓練された店員が応対してくれるのですが、少し路地に入った庶民的な店では、中央アジアやカフカース出身の店員をよく見かけます。そういう店の人はとても人懐っこくて、いろいろ話しかけてくれるのだけれど、ほとんど何を言っているか分からないようなロシア語なんですね。外国人である私が聞いても、その発音は結構まずいんじゃないかなと思える人がたくさんいます。これも多極化したモスクワの姿です。観光客の視点からすれば、とても華やかではあります。

ロシア語と移民労働者

2011 年 11 月 11 日に、ロシア連邦移民局は、モスクワで一晩のうちに数百人の不法滞在タジキスタン人を拘束し、近日中に本国に強制送還すると発表しました。モスクワにいろいろな民族が集まってきていることを象徴するような出来事です。何故そういうことになったか。今年の 3 月にロシア人パイロットが密輸疑惑でタジキスタン政府に逮捕され、裁判で 8 年半の懲役刑を受けました。これに対する対抗措置のようなのですが、そもそもロシア人を逮捕した時にはタジキスタン政府は 4 日以内にロシア政府に通告しなければならないという取り決めがあり、それが守られなかったことが理由になっているようです。見方を変えれば、ちょっと取り締まるだけで数百人も拘束できるほど、モスクワには旧ソヴィエト圏から流入した不法滞在者がたくさん増えていることをこの事件は示しています。

タジキスタンについて少し見ておくと、これは asahi.com の記事(2011 年 10 月 17 日付)ですが、「ソ連が崩壊した 20 年前、タジキスタンは独立した。間もなく内戦が始まり、工場や農場、病院、学校などで働いていたロシア人がタジクを去った。ロシア語を話す機会が減った」、そしてタジク語だけの生活になった、とあります。タジキスタンは、旧ソヴィエト圏の中で最もロシア語が通じない国だと言われている。

そういうタジキスタンからの労働移民がロシアに約 100 万人も入っているのです。そして、その 100 万人の仕送りが、タジクの GDP(国内総生産)の 4 割に達している、そういう状況があります。タジキスタンだけではなく、中央アジア出身の労働移民の 2 割はロシア語が全くできないと言われています。タジキスタンでもこれからはロシア語教育に力を入れられないといけないという方向になっています。

ロシア政府の中でも、ある程度のロシア語力がなければ労働移民として受け入れるわけにはいかないという議論が行われ、国際的なロシア語教育に真剣に取り組むようになりました。ТРКИというロシア政府認定のロシア語検定能力試験があり、このテストを労働移民の人たちに積極的に受けてもらおうという動きも強まっています。

モスクワとペテルブルグ

ここで、もう一度映画を見ます。ロシア人から見たチェチェン・カフカースが語られています。すべてのロシア人がこのような偏見を持っているわけではないと思いますが、ロシア人の一つの典型的な見方と言ってよいでしょう。それに対して、カフカース側からの反論も出てきてぶつかり合います。少年の事件が映画の主軸になってはいるのですが、その横に広がっていく陪審員たちの感情の衝突がエネルギーに描かれています。

(映画の一場面を上映)

	ペテルブルグ	モスクワ
歴史	無(未来も)	有
コイン(喻)	日常使用	希少コイン(使えない)
人物	有能/労働	善良(退屈/休息)
オリジナル性	無	有
都市	ヨーロッパの町	ロシアの村
文学活動	出版	談話(サロン)
住人が好むもの	地位、金	十字架、儀式

(ゲルツェン「モスクワとペテルブルグ」(1842)による)

19 世紀のロシアの思想家アレクサンドル・ゲルツェンが 1842 年に「モスクワとペテルブルグ」という文章を書いています。1851 年に実質的にロシア最初の鉄道であるモスクワ～ペテルブルグ間の鉄道が完成するのですが、1842 年はその工事が始まった年です。鉄道ができれば都市間の距離が縮まって、都市の独自性や特徴はどんどん薄まっていくだろうとゲルツェンは書いているのですが、まだ都市と都市の距離が離れていたその時点で、モスクワとペテルブルグの特徴を並べたものが上の表です。

先に見たような今日のモスクワの状況を考えた時、モスクワとペテルブルグが逆転しているようにも思えます。今ではペテルブルグの方がよりロシアの都市とい



った印象があるし、落ち着いています。モスクワは世界の最先端を行っており、ロシア的というよりもグローバルな都市になっている。いわゆるロシア的なところを見たい人はペテルブルグに行った方がいいし、世界中からいろんなものが集まる楽しさやスピード感を味わいたければモスクワがいいのだと思います。留学先を考える場合には、都市ごとの雰囲気なども含めて判断して、自分に合った都市を選ぶようお勧めします。

メンバーの抱えるもの～年金生活

先ほどの映像で、おじいさんが少しかだけ登場しました。毎回ピントはずれなことを発言するのですが、その役どころは年金生活者です。12 人の陪審員の中に年金生活者が入っている。ロシアでは年金生活者という要素が日本以上に大きな意味を持っているように思います。

ちょっと息抜きです。アネクドットを紹介します。2000 年ごろの小噺です。

コカコーラの社長からプーチン大統領に電話がかかってくる。

「あなたがたは国歌の歌詞を変更していますが、ひょっとして旗も昔のものに変更するということは

ありませんか？ もしもですが、それで隅っこに小さな白い文字で「Coca-Cola」と書いていただけたら、私どもは、年金や、むこう数年間の生活保護者への支払いなど、あなたがたの経済的な問題を解決しますよ...」。これが前半。

2000 年といえば、ロシアが経済的にまだまだ厳しかった時期です。上から白青赤三色のロシア国旗を、真っ赤な地の旧ソ連国旗に変えてくれませんかというコカコーラの提案があつて、さてオチを見てみましょう。

受話器を手で押さえたプーチンは、当時第一副首相だったカシヤノフにこう尋ねる。「君、アクアフレッシュとの契約はいつ終わるのだね？」。

ここでニヤツとしていただけると嬉しいのですが、分かりですか。アクアフレッシュというのはロシア国旗と同じ三色に色分けされた、あの歯磨き粉です。これがロシアでも売られているのですね。

これはあくまで小噺ですが、当時のロシアにおいてアネクドットに出てくるほど、年金が大きな経済問題になっていたということが分かります。

今年の 12 月にロシアの下院選挙が行われます。先週(11月12日付)の読売新聞の記事ですが、メドヴェージェフ大統領が「石油価格が下がっても、みなさんの年金は公約通り支払います」と発言していました。最近、メドヴェージェフ・プーチン体制の支持率が下がってきているのですが、その原因の一つは、年金や経済の先行きがいま一つ見えないうといったところにあります。ロシアの年金生活者の数は 3000 万人で国民の 5 分の 1、その支持を取りつけるのは選挙戦略上大事なことなのだ、と書いてありました。

1990 年代から 2000 年代初め頃、財政難で年金の振り込まれる日が予定より 1 週間、2 週間遅れるといった事態がよく起こりました。不安を抱えた年金生活者たちが街頭に出て、「飢えた年金生活者はオオカミより怖い Голодный пенсионер страшнее волка」と書かれたプラカードを持ってデモ行進していたのが印象的です。ロシアにおいて年金はとても大きな社会問題なのです。



メンバーの抱えるもの～詩(?)

陪審員の中にもう一人クローズアップしたい人がいます。冒頭に紹介した陪審員のメンバーに墓の管理人がいました。墓の管理人であることは映画の最後の方になってからわかるのですが、それまでは陪審の空き時間に詩を書き、この言葉と韻を踏むにはどんな言葉がいいかな、とか皆に聞いたりしています。ちょっとロマンチックな人として描かれていました。

「ロシア人というのは法律で動くんじゃない。感情で動くものなんだ」と強く主張する彼は、「さすが詩人！」と思わせませう。ロシア社会では、作家とくに詩人は「社会の良心」であるとよく言われてきました。12 人の陪審員の中に詩人が選ばれていてよかったなと、私もこの場面で思いました。

(映画の一場面を上映)

ロシアは「詩の国」とも言われています。19 世紀の初めに生きたプーシキンの詩や、多くの詩人の詩を、ロシア人はいくつも覚えています。先ほどのアネクドットもそうですが、これ



からロシアに行こう、あるいはロシア人と親しく接してみたいと思っている人は、小噺や詩や歌のレパートリーをいくつか持っていると、とても役に立ちますよ。歌であれば『カチューシャ』とか『モスクワ郊外の夕べ』くらいは歌えるようになっているとよいですね。

ここではプーシキンの代表的な詩をいくつか紹介しておきます。

Люблю тебя, Петра творенье,
омаеを愛す、ピョートルの創造物よ
Люблю твой строгий, стройный вид,
愛す、おまえの厳かで、美しいたたずまいを
Невы державное течение,
ネヴァ河の堂々たる流れを、
Береговой ее гранит,
その岸辺の御影石を

『青銅の騎士』(1833)より

Москва ... как много в этом слове
モスクワ—ロシア人の心にとって、この言葉の中に
Для сердца русского слилось!
どれだけたくさんのことが流れていることか!
『エヴゲーニー・オネーギン』(1823—1831)より

Я помню чудное мгновение:
ぼくは奇跡の瞬間を覚えている、
Передо мной явилась ты,
ぼくの前に現れたのだ、きみが
Как мимолетное видение,
つかのまの幻のように、
Как гений чистой красоты.
清らかな美の権化のように。

詩「...に」(1825)より

プーシキンが亡くなった時、彼について「初恋のごとく、ロシアの心は忘れぬだろう」と書いたのはチュッチェフです。それに対して、「初恋を忘れられない者は、最後(最新)の恋が理解できない」と言ったのが、20 世紀初めの前衛詩人マヤコフスキーでした。いずれにしてもロシアの文学の中心の一つに、プーシキン、あるいは詩があるわけです。

(映画の一場面を上映)

映画にもどると、その詩人がいいことを言うなあと思っていたら、その後、「実は、墓の管理人をしているんだ」と言い始めるあたりからイメージが大きく変わってしまいます。画面を見ると分かりますが、詩人らしからぬ高価な腕時計をしています。「信念の無い人間は何でもやりだすんだ。実は俺もそうなんだ」と彼は言います。墓に遺体を埋葬するときに、わざとその墓穴に水を貯めて、サクラ役のおばあさんに「墓が水浸しでかわいそう！」と家族の前で言わせる。そこで墓の管理人が、「もう一つ隣のところが空いているから、今なら 500 ドルで移してあげますよ」と言う。するとみんな 500 ドル払う。金額は人によって値踏みするんだ、と。埋葬にかこつた「ぼったくり」をやるのです。そうやって稼いだ金の一部が高級腕時計になっているのですが、それだけではない。一方で彼は故郷の学校に教材や資金の寄付もしている。彼の寄付でようやくその学校はまともな教育をすることができる。彼は言います。「だから俺は、その学校の子供たちからものすごく感謝されている」。すごくアイロニカルですね。稼ぎ方は真っ当ではないけれども、やっていることは真っ当なところもあるわけで、これを自己満足と切り捨てていいのかどうか、なかなか難しい。ここにはロシア的精神の現代における混迷が現れているのかもしれない。

あえて有罪にする？

12 人の陪審員たちの議論は、いよいよ佳境を迎えます。証言者の話や、殺害に使われたナイフなどを検証していく中で、これもロシア的要素ですが、マフィアのような悪質な不動産屋がマンション用地を獲得するためにこの事件を仕組んだことが分かってきます。先日モスクワの空港から市内中心部まで渋滞を越えながら走っている時に、タクシーの運転手さんに「あのお城のような建物は何ですか」と聞いたら、「いや、普通の家ですよ」と言われました。今モスクワの市内でも郊外でも豪華なマンションや高層ビルがあちこちに建設されています。建設ラッシュと不動産ブーム、これも現在のモスクワを特徴づけるものの一つですが、事件の背景が明らかになってきました。

結論として、少年は犯人ではないということがはっきりしてきます。ところが、それをあえて有罪にしたらどうかと、議長役の芸術家(ミハルコフ監督自身が演じている)が言い始めるのです。それに対して、「私たちは少年が犯人ではないことを突き止めたじゃないか」という発言。このあたりから、「わ

れわれ **мы**」という言葉がたくさん出てくるのですが、その何分かの時間、12人の陪審員たちは明らかに **мы** として一体化している感じが強く伝わってきます。陪審という場の中で **мы** が生み出されてくるわけです。

このまま無罪放免で釈放すれば、お父さんもお母さんもない、家族も身寄りもないこの少年を、悪徳不動産業者たちはすぐに殺してしまうだろう、と議長(芸術家)は心配するのです。少年を守るためにはあえて有罪にして刑務所にかくまった方がいい。そして弁護士や検察に働きかけて本当の犯人を探そうというわけです。「ロシア人は法よりも感情で動く」という話がありましたが、法を無視したかのような結論に向かい始めます。



ところが、「それでは、誰が犯人捜しをするんだ」という話になると、それぞれに「いろいろ事情がある」「忙しくてとてもできない」ということになって、まとまりかけたものが、ふわりと離れていきます。結局、あえて有罪にするという結論にはならないのですが、物語は劇的な結末を迎えます。

ロシア的精神～法を超える感情

「あえて有罪にする」というような突飛な結論が何故出てくるのか。これは「ロシア的精神」としてよく指摘されてきていることですが、彼らの心の奥にあるのはきっと「ロシア人は法に向いていない」「法に馴染まない」という思いなのでしょう。

「法は強くてゆるぎないが、慈悲の心はそれをはるかに凌ぐ」。これは、この映画の最後に1行、浮かび上がってくる言葉です。法を守らないと言われるロシア人ですが、ロシア人の側からすると、われわれはそれ以上に自分なりの正義や信念にもとづいて行動してきたという、別の価値観なり考え方があられるわけです。法律というのは、ヨーロッパ的なもの、あるいはローマ的なものとして考えられています。ロシアにはそれが欠如しているのかもしれないし、それこそ縁がないのかもしれない。とにかくロシアはちょっと違うのだということが言われてきました。ちなみに、「なぜロシア人は法を守らないのか？」という問いに対して、シンプルな答えとして「ロシアはあまりに広すぎて、法を破っても捕まらないからだ」と解説本に書いている人もいますから、いろんな理由があるのかもしれない。

「ロシアになくてこれまでもなかったものは、法秩序の感覚、人間と市民の尊厳の基礎である。すべてにおいて、そして永遠に恣意がある。それが、ロシア人の本能なのだ」。これは19世紀初めのデカブリスト、ニコライ・トゥルゲーネフの言葉です。

このような法を超越する考え方は、そもそも昔からロシアに根深く存在していたことを知っておく必要があります。

見守る聖像画(イコン)

物語は、少年を無罪にしておしまいになるのですが、この陪審員たちの議論をずっと見守っていたものがあります。ちょっと見てみましょう。最後の部分です。

(映画の最後のシーンを上映)

陪審員の一人、最初に異議の声を挙げた物理学者が忘れ物を取りにもどって来ます。彼が映画の冒頭に体育館の片隅に置いた物は何だったのか。ロシアのキリスト教、正教の小さな聖像画(イコン)を、彼は陪審の場に向けて見守るように置いていたのです。あまりにうまいオチで、にわかに同調できないのですが、ミハルコフ監督がこの映画にこめたメッセージなのだと思います。

イコンに象徴される正教(キリスト教)は、ソヴィエト時代には完全な禁止ではないにしても、権力によって強く押さえつけられていました。ソヴィエト崩壊後に復活して信者がどんどん増え、今や国民の7~8割が正教の信者だと言われています。スターリン時代の1937年に爆破されてしまったモスクワのキリスト復活大聖堂が、2000年代に入って信者の寄付によって完全に再建されたことが、正教の復活をシンボリックに示しています。

『イワン・デニソヴィチの一日』や『収容所群島』などの作品で知られるアレクサンドル・ソルジェニーツィン(1918-2008)は、ソ連崩壊後にアメリカからロシアに帰国して2008年に亡くなるのですが、帰国した時に、ロシアを建て直すための重要な要素として、正教、地方自治、教育の三つを挙げました。ロシアを一つに統一するための中心になるものは正教なのだというソルジェニーツィンの予言は、ある程度当たったのだと思います。



映画『12』から、さらに先へ

今日お話ししたテーマに興味を持ってくれたかたに、関連する作品をいくつか紹介しておきます。

ドミトリー・グルホフスキーの小説『メトロ 2033』(2005年)は日本語訳が出ています。核戦争後のモスクワ、地下鉄を舞台にした作品です。地上の核汚染された世界にはミュタントが住んでいて、人間は地下にしか住めなくなっています。地下鉄はもう動いていないけれど、それぞれの駅には自治組織のようなものが出来上がって、それがカフカース系だったり、ユダヤ系だったり、共産主義者だったり、ファシストだったりします。例えば「赤い線」と呼ばれる地下鉄1号線には共産主義者の同盟が組まれているとか、思わず納得してしまうような、巧みな作り方をしています。そしてここでも、やはり多元文化に対する一つのアプローチが示されている

ロシアの多元文化というものに対して、ミハルコフは正教でゆるやかに、一つにまとめようとしたのですが、グルホフスキーはむしろ「多元文化のまま共存していけばいいじゃないか」という、ある種の楽観主義を提示しています。この人はまだ30歳代なのですが、60歳代のミハルコフに対して世代的な違いもあるのだと思います。

もう一つはごく最近の作品で、セルゲイ・ボドロフ監督の『ヤクザ・ガール Дочь якудзы』(2010)という映画です。奇想天外なコメディで、日本の大物ヤクザの孫娘ユリコが、ひょんなことから一人ロシアの町で、祖父と敵対するヤクザに追われています。そこで、彼女は偶然にも脱獄囚リョーハの命を助けます。すると、その町にいる「ハラキリの先生」と呼ばれているロシア人から、「助けてもらったからには義理 долг чести がある」「義理があるから、生涯彼女に仕えなければならない」と言われたリョーハは、とにかく「義理」のために彼女を守っていくのです。

日本では「義理と人情を秤にかけりゃあ...」と言うので、「義理」の方が「法」に近いのでしょうか。しかし、この作品では「義理」が、ちょうど、映画『12』で表現された法を超える感情と似たようなものとして考えられている。この「義理」にロシア人が共感していくわけで、ロシアと日本の精神性の近さといったものも感じ取ることができる作品だと思いました。

ソボールノスチ(縛りのない、自由な統一性)

まとめに入りましょう。ロシアで、今何が起きているのか。

ロシアはロシア人中心の多民族文化の国であるわけですが、それが中心のない多元(多極)的な文化に移行してきている。少なくとも「横の時間軸」で現在のモスクワを見ているとそう感じられます。その中でのロシア人の役割や存在意義の模索がなされているのだと思います。

もう一つの「縦の時間軸」で見ると、ロシアには法を超える感情というものがあります。ミハルコフが映画を通じて提出したのは、「ロシア人は、そもそも法律に頼るのではなく、自分なりの正義というものを持っていたのではないか。それを思い出せ!」というようなメッセージです。つまり陪審という法律の場で、みんなが「はい、有罪。それでお願いします」というのでは



なく、自分なりの正義、ロシア的精神をもう一度思い出してほしいのでしょう。結論として私が読み取ったのは、ロシアの国の中には様々な立場があるけれども、法律だけでドライに考えるのでは

なくて、それぞれが自分なりの正義をぶつけあっていくことで、陪審という一つの場が一つの мы(われわれ)というものを作り上げたように、ロシアは一つになることが出来るということです。

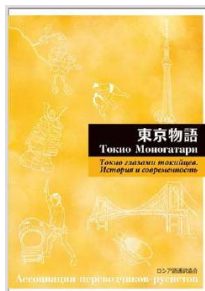


セミナー参加者で会場は満席でした

ミハルコフがそのようなメッセージを発していると考えたときに、とくに19世紀のロシアで取りあげられた概念で、「ソボー

ルノスチ」という考え方を思い起こしました。これはもともと正教にもとづく考え方で、神の下で縛りなく(教会のシステムに依存するのではなく)、自分たちの自由な意思で集まって、生みだされてくる統一性です。これは、ロシア的精神の一つとして言及されつつけてきています。「ソボールノスチ」と今回の映画は、深いところで繋がっているのではないかと思います。(2011年11月19日/東京)

東京物語 (Токио Моногатари) ～ロシア語版・東京案内



ロシア語通訳協会からロシア語版ガイドブック「東京物語」が昨年末に出版された。東京中心部(銀座・日本橋・新橋・六本木・赤坂・新宿)をはじめ、東部、西部、北部など地域ごとの東京案内がロシア語で綴られている。内容はといえば、常連客が語る歌舞伎や能の魅力、築地市場といった定番的なものから、

芝泉岳寺と赤穂浪士、上野公園と明治維新、清澄庭園と岩崎弥太郎、フーテンの寅さんと山田洋次郎映画、秋葉原とオタク文化、三鷹の森とアニメ、グルメ(レストランや東京銘菓)まで、実に幅広い。日本人でも普段は気づかずに通り過ぎてしまうようなエピソードが一杯盛り込まれている。日本と東京をロシア語圏の友人たちにより深く知ってもらうために、本書は格好のガイドブックとなるだろう。

なお、ロシア語通訳協会では、「東京物語」の日本語版も別売りしている(A4版128頁)。ロシア語を勉強している人や将来通訳ガイドをめざそうという人には、日本語原稿と照らし合わせてロシア語表現を勉強してみるのもいいだろう。

編集発行;ロシア語通訳協会

A5版 380 頁(うちカラーグラビア 32 頁)

価格;4800 円

問合先 ⇒ TEL/FAX 03-3551-4190(ロシア語通訳協会)

エクメネの最果てへ —サハ共和国 冬の旅—

【第11回】岡本 健裕



読者のみなさま、本連載はこれで丸3年を迎えました。応援してくださっている方にも、そうでない方にも、ひとしくお礼申し上げます。長らくのお付き合いありがとうございます。

時は2009年1月上旬、私たち一行はいま、世界で最も寒い町のひとつ、ヴェルホヤンスクを訪れ、そこから北に少しドライブに出ているところです。一行とはすなわち、

熟練ドライバー アナトリーさん
達人牧場経営者 ニコライさん
有能現地旅行会社スタッフ サルダナさん
敏腕新聞記者 オオノさん
筆者 オカモト

の5名のことでしたね。では、ここから前回の続きを書き進めましょうか。

アナトリーさんの運転するウアズは、突然、疎林の中で立ち往生してしまいました。ここはどこでしょう。ヴェルホヤンスクからの方角と距離くらいは大体わかりますが、さて、いざとなったら歩いて帰れるかしら。でも、途中で暗くなっちゃうのもいやだなあ…。さっき昇ったばかりの太陽は、もう傾きかけています。沈むのはもうすぐのはず。そんな状況下でも、熟練ドライバーのアナトリーさんはさすがです。慌てず騒がず、悠々とウアズのボンネットを開けに降りて行きました。

静かです。さっきまで強力なエンジン付きの船に乗って大海へぐいぐい切り込んでいたのに、動力を失った途端、周囲の空間が一変しました。それはただ広いばかりの水面に、はしけでじーっと浮き続けているような、安らかで、美しく、

恐ろしい世界です。

アナトリーさんは、外でしばらくごそごそやっていたんですが、案外とすぐに戻ってきました。そしてエンジンがかかります。お見事！

「ウアズはすぐ故障するけど、すぐ直せるんだ。これは大事なことだよ。もし冬道で故障が修理できなかったら…フショー(それまで)。」アナトリーさんはそう言ってニヤリとしました。フショーとはロシア語で、「全部」とか「以上」というくらいの意味ですが、生命を全うすることまでも、こんなふうにフショーで片づけてしまうと、どうも怖さや緊張感が全然なくなってしまうような気がします。逃れられない運命にいちいち身構えるのがアホらしくなってくるというか、むしろあつけらかんとして小気味良いくらいです。そうか、死ぬって簡単なことなのかもしれない…。

こんな考えに取り憑かれると、名誉ある死とか、恥多き人生とか一切どうでもよくなるので危険です。ロシア語話者はきっと、本来は深い苦悩と絶望を抱えるあまり、悟りの境地でこのフショーを会得したに違いない、と思うことにしましょう。

そうそう、アナトリーさんの言葉には続きがあって、「だから、我々はウアズかトヨタしか乗らない。簡単に直せる車か、絶対に故障しない車のどっちかだ。」ですって。ちょっとトヨタ、すごくないですか？いやかなりすごいですって！

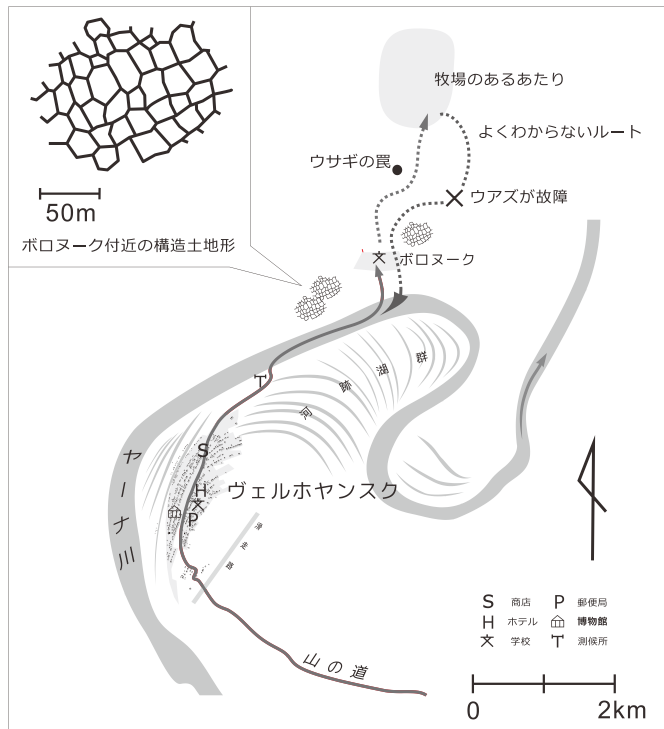
ウアズは無事に疎林を脱し、何事もなかったようにもう一度ボロヌークの集落を通り抜けて、凍結したヤーナ川を渡っています。ヴェルホヤンスクはもうすぐです。

サルダナさんが「町でどこか行ってみたいところはありませんか。」と訊ねてきました。ちょうど、2箇所ほど、立ち寄りたいと思っていたところがあったので、リクエストするとすんなりOKしてもらえました。後ほど向かうことにしましょう。

ヴェルホヤンスクの町並みにさしかかっただけで、ここまで案内をしてくれた牧場経営者のニコライさんの家がありました。ニコライさんとはここでお別れです。おや、辺りはもうほとんど暗くなっているではないですか。あけぼのと黄昏をいっ



左からサルダナさん、アナトリーさん、ニコライさん、筆者



ぺんに持ってきて、すぐに去っていった今年最初のヴェルホヤンスクの太陽さん、また明日。そしてニコライさんも、さようなら。貴重な体験をありがとうございました。

さて、私がサルダナさんにリクエストした行き先の 1 箇所目は、商店です。何といってもここは、世界で最も寒い町ヴェルホヤンスク、ここでは生活消費財がどのように供給されているのか、大いに興味をそそりますよね。だから連れて行ってもらったことにしたのです。

商店はニコライさんの家からすぐのところでした。周囲の家並みと溶け込む、一戸建て住宅サイズの木造建築です。

店舗の中に入ると、広くはないスペースに食料品から医薬品、生活雑貨まで幅広く網羅した商品群が目飛び込んできます。その品揃えの無節操なことと言ったら、小さいものは小麦粉から、大きいものは陶製の洋式便器まで置いてあるくらいです。ジャンル問わず何でも売るけど、ただ、さすがに物量は豊富ではないようです。値段も都市部より高い。

店番は、この町ではちょっと珍しい、ロシア系の顔立ちのお姉さんが一人でこなしていました。ちょっと質問してみました。

「この商品はどこから運ばれてくるのですか。」

「ヤクーツクよ。」

「飛行機で？」

「違うわ、トラックよ。」

「トラック！ということは、ジムニックを走ってくるのですね。」

「そうよ。」

ジムニックというのは、冬道のことです。このヴェルホヤンスクは、ヤクーツク方面とつながる道路がなく、陸の孤島の

ようになっている、と以前に書きましたね。確かに「一年中つながる道路」はないのですが、冬は事情が違ってきます。橋のない川も、タイヤを飲み込む湿地帯も、寒さが全てを凍結させ、強固な路面に変えてくれるのです。おかげで、北部ユーラシアの広大な領域には、冬の間だけ使える道、ジムニックが縦横に出現するのです。

「ヴェルホヤンスクにつながるジムニックは、どこを走っているのですか。バタガイ経由ですか？」

「知らないわ。私は通ったことがないもの。でも多分、ヤーナ川の上流方向だと思う。バタガイを経由しないで、直接届くのよ。」

惜しむらくはこのお姉さんが、もう少し物流に詳しい人だったらよかったのですが、それでも十分、面白い話が聞けました。ひとつも買い物しない冷やかし客としては、これ以上を望むのは欲張りというものです。

何かちょっとくらい買い物するべきなんじゃないか、という迷いもあったのですが、せっかく遠路はるばる最終消費地まで届いた商品を、数日滞在するだけの旅行者が買い取ってしまっているのだろうか、と考えたとき、それもできない気がしました。例え些細なものでも、全部命がけでとどいた物資なのです。さっきのウアズの故障体験で身にしみましたね。値段が高いのも当然なんです。

サルダナさんにリクエストした行き先の 2 つ目は、郵便局です。世界で最も寒い町では、郵便物はどのように取り扱われているのでしょうか。これまた、大いに興味をそそりますよね。ね？

郵便局は学校のすぐ向こう側にありました。小さな町なのでアナトリーさんのウアズに乗ったら、1 分とかかりません。数百 m の移動で着いてしまいました。郵便局の建物は、やはり木造で、周囲の家並みと調和した外観です。中は薄暗くて、暖かくて、なにやら居心地のいい感じ。郵便局というと、日本人のイメージではもっぱら蛍光灯に照らされた白色のオフィスですが、ここは白熱灯を使っているんですね。

郵便局でまずやってみたかったこと、それは日本へはがきを出すことです。ちょうど、いい絵はがきがありました。キシリャフの絵はがきです。キシリャフ(КИСИЛЯХ)とは、ヴェルホヤンスクからヤーナ川をしばらく下ったところの山上にある奇岩群のことです。このあたりの人々にとっては、それはそれは聖なる土地で、また、夏には子供たちがそろって登山したりする行楽地でもあるのだとか。しかし、そのような予備知識を持たぬ者にとっては、木も生えない殺風景な山肌に、やたらと岩が転がっているだけにしか見えないという、十二分にマニアックな被写体。これです。これこそ、ヴェルホヤンスクから日本へ送る絵はがきにふさわしい。

せっせと自分の大阪の住所を書いて、メッセージを書いて、さて切手を貼りましょう、という段階で、ちょっとしたハプニングがありました。このはがきを日本まで送りたいのです

が、と局員の女性に差し出すと、何やら様子がおかしいのです。なんと、これまで日本行きの郵便物を取り扱ったことがないから、料金がわからないと言うではありませんか。大体、はがきの料金なんて、宛先が日本だろうがアルゼンチンだろうが、大した額でもないでしょう。適当に一番高い行き先の料金でいいですよ、と言ったのですが聞き入れてもらえず、まじめな局員さんが正しい料金を突き止めるまで、しばし待たされることになりました。

待っている間、ふとカウンター奥の壁に目をやると、何やら大きな図面が貼り付けてあります。タイトルを読むと、**СХЕМА ДОСТАВКИ...**おっとこれは、郵便配達経路図だ！しかしこれは、見れば見るほど面白い手書きの地図です。ヴェルホヤンスクの街路がのびのびと描かれ、その両側には四角形で表された家々が並んでいます。そしてそれらを結びつけるおびただし数の矢印。このまったく洗練されていないデザインから放たれる不思議な機能美の、絶妙なバランス！その味わい深さに、ついついはしゃいでしまった私は、オオ

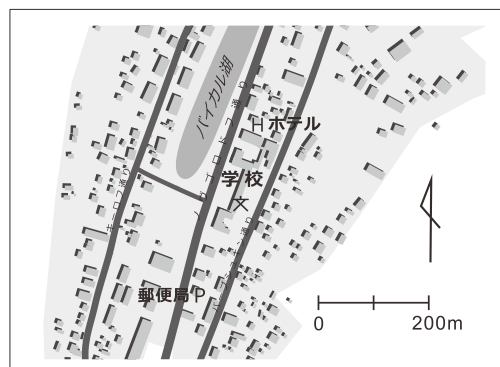


ヴェルホヤンスクの郵便配達経路図(部分)

ノ記者にせがんで何枚も写真を撮ってもらいました。というわけで、たぶん本邦初公開、ヴェルホヤンスクの郵便配達経路図(部分)です。お楽しみあれ。

図を見ていると、何気なく行き来していた表通りにも、ちゃんと名前があることがわかります。ホテルや学校、そしてこの郵便局も面しているヴェルホヤンスクのメインストリートは、ノヴゴロドフ通り(ул. Новгоро́дова)というようです。そういえば、学校もノヴゴロドフ名称、でした。そして、図をよく見るとさらに意外な事実が発覚します。ホテルと学校の目の前、単なる空き地だと思っていたところ、そこは実は湖だったのです。細長い形状の河跡湖で、名前もついています。なにに **БАЙКАЛ...**ええっ、バイカル湖だと！誰が知ろう、ヴェルホヤンスクにはバイカル湖があって、私たちはその湖畔のホテルに泊まっていたというわけです。しかしどうしてこんな名前がついたのでしょうか。郵便局員の女性に聞いても、アナトリーさんに聞いても、昔からそう呼ばれているからわからないよ、とのこと。どうやら単なる遊び心でつけた名前じゃなくて、由緒ある地名みたいです。しかしこの町はまだまだ想

像外のことがたくさん眠っていますね。郵便局に行かなかったら、きっとこの事実には気づかないままだったでしょう。地元の住民にとっては、当たり前すぎることで、誰もわざわざ教えてはくれなかったはずですから。



ところで、図の中には旗のような目立つ印がいくつかありますね。これは犬を飼っている家を示しているのだそうです。明らかに持ち歩けない壁掛サイズの地図にそんな印をつけて、果たして実用上意味があるのか、という疑問は口にしましたが、実際どう使っているのでしょうか。常々目に触れるようにしておいて、暗記の助けにしているのかもしれない。

おや、ようやく郵便料金の調べがついたようです。26 ルーブル。だいたい80円くらいになるでしょうか、安いっ。でも、料金がわかったと思ったらすぐに次の問題が起きました。今度はちょうどいい額の切手がないと言いだしたのです。どうしても、小額の切手をたくさん組みあわせて貼るしかない、と。ぺたぺた貼っていったら、大変です、宛先が覆い隠されてしまいそうですよ！5ルーブル切手4枚に3ルーブル切手2枚、全部で7枚にもなりました。しかも、少額切手はなぜか1枚のサイズが妙に大きいのです。どうにかぎりぎり全部貼りましたが、はがき1つ投函するのにこんな騒ぎになるとは思いもしませんでした。

さて、そうこうするうちに、とつぷりと夜になりましたが、今日はホテルで夕食を摂りません。なぜなら今夜は町内の一般のご家庭を訪問して、食事をいただくことになっているからです。



夜のホテル「寒極」

どうです、私たち、ヴェルホヤンスクに滞在してこれからやっと2晩目だというのに、ずいぶん中身の濃いプログラムが盛りだくさんだと思いませんか？では次回、その家庭の様子をご紹介します。つまり、連載はまだまだ続きますので、よろしく願いいたします。(つづく)

※写真はすべて北海道新聞の大能記者による撮影です。

ロシア(旧ソ連)よりペンパル募集!

お友達をつくりましょう!

①Name ②Sex ③Born(Age) ④Address ⑤E-mail ⑥
Occupation, Hobby ⑦Language

①Aleshina Maria ②Female ③1993 ④Russia, Lyubertsy (Moskovskaya oblast) ⑤ manyz Zagadka@mail ⑥ Music, Movies, Japanese culture, Playing the violin and the guitar ⑦Russian

①Bogdanova Kristina ②Female ③1986 ④Belarus ⑤ ubitgenia@mail.ru ⑥Literature, Religion, Psychology, Fine Arts, Iconography, Music, Linguistics, Languages, Publicism, Pedagogy, Oriental Poetry, Movies ⑦Russian, English

① Kytmanov Maksim ② Male ③ 1989 ④ Russia, Moskovskaya oblast, Solnechnogorsk ⑤ kytmanov-max@mail.ru ⑥Anime, Swords, Mythology ⑦ Russian, English

①Savelyanov Egor ②Male ③1999 ④Russia, Moscow ⑤ siriuz3@gmail.com ⑥Playing the piano, Japanese History, Japanese language, Sambo, Russian History, Collecting fossils (ammonites & belemnites), I'm writing an adventure novel. ⑦Russian

①Danilova Ekaterina ②Female ③1993 ④Russia, Ufa (Ural) ⑤ pilka245@mail.ru ⑥ Art, Anime, Sports, Travelling ⑦English

① Nesterenko Konstantin ② Male ③ 1988 ④ Russia, Saint-Petersburg, Kronstadt ⑤ gabrielle13@mail.ru ⑥ Movies, Fantasy, Alternative prose, Manga, Anime, Football ⑦English, Russian

①Kompaniets Yulia ②Female ③1995 ④Russia, Moscow ⑤ kittis75@yandex.ru ⑥ Japan, Photography, Painting, Watching Japanese movies ⑦Russian, English

①Orlova Ira ②Female ③1997 ④Ukraine, Chernigov ⑤ Orlova.irene@mail.ru ⑥Anime, Tennis, I want to travel. ⑦Russian, English

① Pognaeva Marina ② Female ③ 1989 ④ Russia, Stavropolskiy kray, Lermontov (Southern Russia) ⑤ SheaRea09@ya.ru ⑥Sports, Literature, Paintings, History ⑦Russian, German

①Collette Voigt (Nickname) ②Female ③1985 ④Russia, Moscow ⑤ dev.kruci@gmail.com ⑥ Travelling, Photo,

Fashion, Music (V-Rock, Alternative), Anime, Drama, Driving (car and bike) ⑦ English, Russian, Japanese

① Kayupova Elvina ② Female ③ 1987 ④ Russia, Ufa, Republic of Bashkortostan (Ural) ⑤ gaze-rockokada@rambler.ru ⑥ Japan, Japanese Language, Japanese culture, Music,

Opera (I study in the Operatic Vocals Department of Ufa State Academy of Arts), Japanese drama, Manga, Learning languages, Dance ⑦English, Russian

① Georgieva Ioanna ② Female ③ 1994 ④ Russia, Kemerovo (Siberia) ⑤ chika-dragon@yandex.ru ⑥ Music, Paintings, Poetry, Reading, Internet, meeting with friends, Japanese movies ⑦Russian, English

①Belaya Dana ②Female ③1986 ④Ukraine, Zaporozhie ⑤ dope_stars@mail.ru ⑥Music, Anime, Japan ⑦Russian

①Pevtsova Maria ②Female ③1987 ④Russia, Moscow ⑤ 87pma@rambler.ru ⑥Japanese Culture, Spanish language, Photography, Classical literature ⑦English, Russian

①Kulikova Evgenia ②Female ③1995 ④Ukraine, Kiev ⑤ anelia_asare@mail.ru ⑥ Music, Art history ⑦ English, Russian

① Konyaeva Ekaterina ② Female ③ 1988 ④ ? ⑤ blackrayla@mail.ru ⑥Anime, Music, Books, Science fiction movies, Horror movies ⑦Russian

①Smirnov Nikolay ②Male ③1974 ④Russia, Kostroma ⑤ dzikai@mail.ru ⑥Painting, Sculpture, Cycling ⑦Russian

①Marunyak Vitaly ②Male ③1988 ④Russia, Kaliningrad ⑤ Dezert@baltnet.ru ⑥Rock music, Playing the Guitar, Cycling

① Kolehikova Daria ② Female ③ 1988 ④ Russia, Novosibirsk (Siberia) ⑤ elka_kis_kis@mail.ru ⑥ Nature, Movies, Music, Theater, Photography ⑦Russian, English

①Salim Ainura ②Female ③1988 ④Kazakhstan, Almaty ⑤ love_ainysha@mail.ru ⑥ Snowboarding, Photography, Anime, Foreign languages, Reading ⑦English, Russian

①Emelianov Andrey ②Male ③1973 ④Russia, Samara ⑤ andreas555@inbox.ru ⑥ Japanese culture, Tradition, Customs, Actualities in Japan, Japanese language ⑦ Russian

①Melnikova Marina ②Female ③1990 ④Russia, Tomsk (Siberia) ⑤ mira13@sibmail.com ⑥ Paintings, Oriental Martial Arts ⑦Russian

①Akari Shin (Nickname) ②Female ③1990 ④Russia, Ufa (Ural) ⑤ Wassabi11@mail.ru ⑥ Music, Anime, Genetics, Biology, Sports, Manga, Japanese TV drama, Japanese culture, English, Japanese ⑦English, Japanese



4~7月の予定

4月10日 JIC 東京 ロシア語講座 前期スタート!
初級(火) 中級(水) 入門(木) 時事会話(金)

4月16日 JIC 大阪 ロシア語講座 前期スタート!
上級(月) 入門(火) 初級(木) 中級(金)

最新情報は JIC のホームページに
随時掲載いたします。ぜひご確認ください!!!



大阪支店は2月1日より

「JIC 大阪・ロシア留学デスク」

に名称変更しました

大阪支店は、「JIC大阪・ロシア留学デスク」の名称で
主にロシア留学・語学研修の相談窓口として
営業時間を10:00-15:00 に変更して業務をいたします。

<JIC大阪・ロシア留学デスク移転先>

〒540-0032

大阪府大阪市中央区天満橋京町2-13 ワキタ天満橋ビル812号

TEL:06-6944-2341 FAX:06-6944-2318

業務時間: 平日 10:00-15:00 土・日・祝日休業

※業務時間内でも不在となることがありますので、
来社の際は必ず事前予約をお願いします。



* * JICのロシア語留学・研修 * *

ロシア長期留学9月生・募集中

期間: 2012年9月より10ヶ月

※ウラジオストク極東連邦大学は10月より10ヶ月

締切: 2012年6月15日(金)



モスクワ国立大学 447,000 円(授業料 10ヶ月)

サンクト・ペテルブルグ国立大学 590,000 円(授業料 10ヶ月)

ウラジオストク極東連邦大学 338,000 円 (授業料 10ヶ月)

※上記の金額以外に別途、寮費、手配料、渡航費用、ビザ代金及び
取得手数料などががかかります。

ロシア語個人・グループ研修(随時募集)

☆モスクワ・ダリパス社 1週間~4週間 (ホームステイ3食付)

☆モスクワ大学 2週間~長期 (ホームステイ朝食付/大学寮)

☆ペテルブルグ大学 1ヶ月~長期 (大学寮/ホームステイ/ユースホステル等)

☆ウラジオストク極東連邦大学 1週間~長期(ホームステイ2食付/大学寮)

☆ウラジオストク経済サービス大学 1週間~4週間(ホームステイ2食付き)

☆ハバロフスク外国語教育センターGEO(ホームステイ2食付)

ロシア語個人・グループ研修(随時募集)

リデン&デンツ スイスの会社出資のロシア語学校

個人・グループレッスン。モスクワとペ
テルブルグにあり、インターナショナル
な雰囲気。初心者より上級者まで。
2週間より可能。基本はホームステイ
2食付。詳細はパンフレットをご覧ください。



デルジャーヴィン・インスティテュート

全ロシアプーシキン博物館の協力に
よりペテルブルグに設立された学校
で、18世紀の建物内で授業が行わ
れます。アットホームな雰囲気でお勧
めです。グループレッスン、1週間より
可能。基本はホームステイ2食付。
詳細はパンフレットをご覧ください。



◆JIC ロシア留学デスク◆

ロシア留学・旅行のお問合せ・ご相談に応じます。
お気軽にお越しください。

東京事務所 平日 10-18時 03-3355-7294/7295

大阪事務所 平日 10-15時 06-6944-2341

※事前にご予約ください

留学・研修各種パンフレットは JIC へ
ご請求ください。留学・旅行相談お気軽に

~Jクラブ (JIC友の会) のご案内~

JICインフォメーションを年4回、またJICのイベント案内をもちろんお届けします。
ご希望の方には入会案内をお送りいたしますので、ご連絡ください。会費は無料です。
国際親善交流センター